

心理学研究におけるパラノイア感・抑うつ感の定義と 測定尺度の作成

——被受容感・被拒絶感，賞賛獲得欲求，社会的スキル，疲労感との関連の検討

杉 山 崇¹⁾

A consideration and constitution of definitions and measurement scales about paranoid sense and depressive sense in psychological study: Verifying about three hypothetical suggestions among sense of acceptance, sense of rejection, praise seeking need, social skill, exhaustion.

Takashi SUGIYAMA¹⁾

【Abstract】

Present study has an aim to develop psychological scales of “paranoid sense” and “depressive sense” as result of psychological process not psychiatric symptom. The author, based on bio-psycho-social model, defined paranoid sense and depressive sense that would occur from psychological process and made scales referring to Paranoia-Depression Scale (Bodner & Mikulincer, 1998). The results of research for undergraduate students almost supported the three psychological hypothetical suggestions that based on these definitions. The three suggestions are the correlations between these sense and depression (SDS: Zung, 1965), sense of acceptance, sense of rejection, the influence by interaction of sense of acceptance and praise seeking need, and the effects for social retreat, exhaustion. The scales of paranoid sense and depressive sense would have a certain level of reliability and validity.

Keyword: paranoid sense, depressive sense, constitution of measurement scales.

【要 旨】

本研究は病理ではなく心理学的プロセスの結果として顕れ得るパラノイア感と抑うつ感の尺度を作成することを目的としている。著者は生物—心理—社会モデルに基づいて心理学的プロセスの結果として顕れ得るパラノイア感と抑うつ感を定義し，Bodner & Mikulincer

1) 神奈川大学人間科学部教授／神奈川大学心理相談センター所長（Faculty of Human Sciences/Psychological and Counseling Service Center, Kanagawa University）

(1998) の作成した Paranoia-Depression Scale を参考に項目案を作成した。学生を対象にしたリサーチから尺度構成を行い、信頼性を検討した。また、定義から理論的に示唆される SDS、被受容感、被拒絶感との関係性、被受容感と賞賛獲得欲求の交互作用による影響、社会的退却と疲労感との関係性を検討した。結果はほぼ理論の示唆が支持されていた。パラノイア感尺度、抑うつ尺度ともに一定の信頼性と妥当性を備えた尺度といえることができるだろう。

キーワード：パラノイア感、抑うつ感、測定尺度の構成

1. 問題

抑うつ状態（憂鬱と喜びの喪失が持続した状態）とパラノイアの状態（他者に監視、評定され、自己が害されることに対する怯え）は、異なる異常心理として定義され研究されることが多い。しかし、異常心理学の文脈ではパラノイアの状態は他者からの脅威に過敏になることで抑うつ状態の重篤化を回避した結果であり、「パラノイアの状態を装った抑うつ (camouflaged depression)」とする知見も見出せる (e.g., Bodner & Mikulincer, 1998)。

近年の抑うつ・うつ病臨床では、古くから考察されてきた自己批判的なうつ病だけでなく、被害感が強い事例や他者に批判的な事例の報告も増えているように思われる (e.g., 坂本ら, 2014)。たとえば重たい抑うつ気分に苦しみつつ「あいつもダメだ、こいつもダメだ、こんな事を言っている自分はずっとダメだ!」、あるいは「(自分がこうなったのは) あいつのせいだ、こいつのせいだ!」という心情に悩む事例も散見される。

このような他者批判や攻撃性の問題を一種のパーソナリティの偏りとして考える文脈もあるが、その一部はパラノイアの状態を装った抑うつで、抑うつと同じ発生機序を持つ可能性も考えられる。よって、今後の心理臨床に向けた抑うつ・うつ病の異常心理学研究は抑うつ状態の発生機序だけでなく、パラノイアの状態への移行も考慮した研究が必要になると考えられる。そのため、パラノイアの状態を心理学的に定義し、その定義に基づいた簡便で正確に測定できるツールが必要だと言える。

また、うつ病は心理的な症状、身体症状などさまざまな症状を複合した症候群という考え方もなされているが (杉山, 2002)、研究課題によっては心理学研究でこの定義を採用することは適切でない場合もある。まず、近年の精神医学・異常心理学の文脈では生物—心理—社会モデルで健康と異常を捉え、然るべき支援を構想することが主流になっているが (杉山ら, 2007)、身体症状は生物学的側面に該当している。うつ病の身体症状としては自律神経の亢進、便秘や食欲不振といった生物的機能の停滞などが指摘されているが、これらの症状は生活や労働の環境や体質、食生活などの影響も考えられる。すなわち、必ずしもうつ病の心理学的プロセスの結果とは限らない。よって、身体症状も含めた症候群としてうつ病を測定する尺度を用いてその心理学的プロセスの研究をすることには疑問が残る。うつ病の心理学的プロセスを検討する心理学研究では、心理学的プロセスの結果としての抑うつ状態を定義する必要があると考えられる。そこで、上述の抑うつ状態を定義し、その定義に基づいた

簡便で正確に測定できるツールが必要だと言えるだろう。

2-1. 本研究

以上のことから、本研究では心理学的プロセスの結果として発生するであろうパラノイアの状態と抑うつ状態を考察し、測定ツールの作成を試みる。概念生成にあたっては、生物—心理—社会モデルを考慮してその定義を検討した。すなわち、パラノイアおよび抑うつという心理学的現象を生物学的要因および社会的変数との相互作用を考慮しながら検討した。

2-2. 概念の整理

まず、生物—心理の関連から考えてみよう。パラノイアの状態は他者からの被害に関連する心性であり、抑うつ状態も背景に他者や社会からの受容や拒絶の問題が関与することが知られている（e.g., 杉山, 2005）。つまり、自分に対する他者や社会の攻撃や排斥のリスクのモニタリングが両状態に関与する心理学的現象である。このモニタリングに関与する生物学的側面としては前部帯状回（ACC）を始めとした大脳辺縁系の活動が考えられる。すなわちパラノイアの状態と抑うつ状態には、大脳辺縁系が発する自己の社会的リスクへの警戒信号という共通した神経基盤と心理学的体験があると考えられる。

社会的変数としては、大脳辺縁系を刺激する社会的排斥リスクを連想させる拒絶的な対人関係要因が関与していることがまず考えられる。また、大脳辺縁系の活動は共感的な対応によって緩和することが知られている（岡本, 2009）。よって受容・共感的な対人関係要因が欠けていることも考えられる。

また攻撃や排斥リスクのモニタリングに際して、より自己注目や自己批判を強くして行動を抑制した状態が抑うつ状態と考えられる。抑うつ状態は自分に不利な社会的状況があるときに行動を停滞させて状況が変わるまで身を潜めさせ、生き残りを促進するという進化心理学的考察もある。すなわち抑うつ感は自己価値への疑念だけでなく、行動のエネルギーを低下させて社会的退却を促す心理状態と考えられる。

同じく自己注目ではなく他者に対する疑念を強めてより警戒する状態がパラノイアの状態と考えられる。パラノイアの状態と関連が深い妄想性パーソナリティ障害の考察では権力者など隠れようがない立場になることで猜疑心が高まることが指摘されている。よって他者が自分を標的とし、悪意を持って自分をモニタリングしている事態を連想する心理状態と考えられる。

以上のことから本研究では心理学プロセスを検討するために測定すべき抑うつ状態、パラノイアの状態を以下のように定義した。

〈両概念共通の定義〉

1. 社会的排斥リスクのある拒絶的な社会的変数が関与している
2. 受容・共感的な社会的変数が欠けていることが関与している

〈抑うつ状態の個別の定義〉

3. 疲労や葛藤など行動を停滞させるものである
4. 自己価値への疑念が伴っている
5. 憂鬱または喜びの喪失が自覚されている

〈パラノイア的状態の定義〉

6. 他者が自分を標的としていていると感じている
7. 他者が自分に悪意を持っていると感じている
8. 他者が自分を害すると警戒している

以上の定義は感情との関与が深い大脳辺縁系の亢進が前提となっているために、認知的変数は必然的に感情的な成分を含むものと考えられる。よって、認知と感情を区別することは困難で、両者を含めた概念として定義する必要があるだろう。上記の定義に基づく認知とは物事の知覚・認識の総称で、感情はそれにとまなう情動的な変化という事ができるだろう。ただ、認知が持続すれば情動も持続するので情動状態が慢性化することもある。この場合は変化を捉えることが困難なので、これらのことを包括した定義とする必要がある。そこで本研究では認知、情動の変化、慢性的感情、これらを包括した用語として「感」を採用する。「感」は大辞泉によると「物事に接して生ずる心の動き」と定義されており、物事の知覚・認識としての認知、認知に対応した情動の変化を含んでおり、物事が持続していれば変化が慢性化した状態も示唆する用語と捉えられる。よって、本研究では心理学研究における抑うつ状態を抑うつ感、同じくパラノイア的状態をパラノイア感と表す。

2-3. 項目案の作成

上記の定義に基づいて、Bodner & Mikulincer (1998) が作成した Paranoia and Depression Scale を参考に項目案を作成した。この尺度はパラノイア的状態を装った抑うつ (camouflaged depression) を検討する心理学実験の従属変数として用いるために作成され、実験状況 (自分の課題遂行の結果が思わしくない事態) への心理的反応に関する項目で構成されている。しかし、項目内容は本研究における抑うつ状態およびパラノイア的状態の定義の「3.」から「6.」の内容と合致している。そこで、実験状況に関連する部分を除き、日常生活で経験する心性を表す文言に変更して項目案を作成した (Table 1)。

3. 方法と妥当性検討のための仮説

質問紙は参加者の権利 (回答は自由意志で断っても不利益がない、いつでも止められる、など) を説明し、同意書として署名する形になっているフェイスシートに続いて上記の手続きで作成したパラノイア感尺度 6 項目および抑うつ感尺度 9 項目を配した。「ここ一月のあなたにどの程度あてはまりますか?」と教示し、「全くあてはまらない (1)」から「よくあ

てはまる (5)」までの 5 件法で実施した。また、概念の定義に基づいた妥当性を確認するために、以下の尺度を配した。

被受容感尺度・被拒絶感尺度：両概念に共通の定義「1.」および「2.」に従えば、両概念ともに他者による受容に関する変数である被受容感とは負の相関関係、同じく拒絶に関する変数である被拒絶感とは正の相関関係が見られると考えられる。そこで、併存的妥当性の検討のために被受容感・被拒絶感を測定した。杉山・坂本（2006）の作成した尺度は各 8 項目で構成されていたが、対象者の負担を考慮して本研究では代表作成者と相談の上で構成概念との関連が特に深いと考えられる各 2 項目を抜粋した。「私が行くと喜ばれる場がある」「私はたいていの場で認められている」（以上、被受容感）、「私は、普段人から背を向けられている」「私は、よく人からないがしろにされる」（以上、被拒絶感）4 項目である。

賞賛獲得欲求：本研究では「2-2.」においてパラノイア感是他者の視線から逃れられない状況で高まると考察した。賞賛獲得欲求は他者からの賞賛を求める欲求なので（小島ら，2003），この欲求が高い個人は他者の視線に身を晒すことが増えると考えられる。仮に被受容感が高ければ他者から視線を受容・承認的に感じると考えられるが、被受容感が低い場合は賞賛を求める一方で他者からの視線を批判的に感じるが増えてパラノイア感を増す可能性がある。そこで、小島ら（2003）の作成した賞賛獲得欲求尺度から対象者の負担を考慮して次の 3 項目を抜粋した。「皆から注目され、愛される有名人になりたいと思うことがある」「初対面の人にはまず自分の魅力を印象づけようとする」「人と話すときはできるだけ自分の存在をアピールしたい」で構成されている。

社会的スキル（の欠如）：本研究では「2-2.」において抑うつ感 is 社会的退却を促すと考察したが、自己価値への疑念の結果としての退却なので自身の社会的スキルへの疑念や欠如感として体験されることだろう。そこで、若林・東條（2004）が作成した自閉症スペクトラム指標（以下、AQ）を測定する多次元尺度の社会的スキル尺度から対象者の負担を考慮して次の 3 項目を抜粋して活用した。若林・東條（2004）は AQ を測定する目的で作成しているが、項目は「何かをするときには一人でするよりも他の人と一緒にする方が好きだ。（逆転項目）」「自分の置かれている社会的な状況（自分の立場）がすぐにわかる。（逆転項目）」「新しい友人を作ることは難しい。」と、社会的退却を表す内容で構成されている。

疲労感（身体的ストレス反応）：本研究では「2-2.」において抑うつ感 is 疲労をもたらすことで行動を停滞させ、社会的退却を促すと考察した。そこで、尾関（1993）のストレス反応尺度の下位尺度である身体的疲労感から「体がだるい」「体が疲れやすい」「脱力感がある」の 3 項目を抜粋して活用した。

ツァン自己記入式抑うつ性尺度（以下 SDS：Zung, 1965）：福田・小林（1973）による日本語版の“気分が沈んで憂うつだ”“朝がたは、いちばん気分が良い（逆転項目）”などの 20 項目に“1：ほとんどない”から“4：ほとんどいつもある”までの 4 段階で評定させた。得点を増すほど抑うつ兆候の頻度と程度が高くなるよう構成されている。

なお、SDS と疲労感 is 「この 2 ヶ月間の…」との教示で「ほとんどない (1)」から「ほとんどいつもある (4)」の 4 件法、被受容感・被拒絶感、賞賛獲得欲求、社会的スキルの各尺度には「次の文章について、普段のあなた自身にどの程度あてはまりますか？」との教示

で「全くあてはまらない (1)」から「よくあてはまる (5)」までの5件法で実施した。

調査の概要：心理学関係の授業に参加する大学生を対象とした調査研究を実施した。20xx 年 12 月、18 歳から 23 歳の大学生 230 名を対象に質問紙を配布・回収した。質問紙はヘルシンキ宣言に基づいて対象者に日常生活で受けると想定される負荷を超えないように構成し、倫理的配慮として回答は任意であり拒否することによる不利益はない旨を書面と口頭で繰り返し確認した上で回答を得た。

4. 結果

パラノイア感尺度、抑うつ感尺度の因子分析と各尺度の信頼性：新たに作成した 16 項目に 2 因子構造を仮定した因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、固有値は 6.67, 1.76, .34, .30…と変動し 2 因子構造と解釈した (Table 1)。両因子とも相対的に高い α 係数を示し、信頼性が示唆されている。

既存の尺度から抜粋して構成した各尺度の α 係数は、被受容感が .69, 被拒絶感が .75, 賞賛獲得欲求が .75, 疲労感が .89 であった。 α 係数は項目数を増やすと大きくなる傾向にあるため、項目数を考慮すると相対的に高いと言えるだろう。社会的スキル（の欠如）は .38 とかなり低かったため、3 項目で 1 因子性を確認する因子分析を行った。探索的因子分析では固有値は 1.34, .83, .82 と変動しており、1 因子であることが示唆される。また、すべての項目が第 1 因子に .66 以上の寄与率を示した。今後、概念と尺度の改善が必要と思われるが、本研究では社会的退却の指標として暫定的に活用した。

基礎統計および被受容感、被拒絶感との関連：各尺度間の相関係数、および各尺度の平均値、標準偏差 (SD) を Table 2 に示す。なお、被受容感、被拒絶感、社会的退却などの対

項目	因子負荷量	
	第 1 因子	第 2 因子
de5 私は今の私がいやだ。	0.90	−0.06
de6 私は私自身が恥ずかしい。	0.82	0.10
de1 私は今の自分にがっかりしている。	0.81	−0.01
de4 私は私の才能や能力に疑問を感じる。	0.72	−0.05
de7 私は他人よりも劣っていると思う。	0.71	0.14
de2 今の私は何もやる気にならない。	0.69	−0.06
de3 今の状態では私の本当の力はわからない。	0.51	−0.04
de8 私はとても疲れ果てている。	0.48	0.28
de9 私はとても悲しい。	0.48	0.33
pr2 私は、人が私のことを噂している気がする。	−0.08	0.87
pr4 私は、他人が私に嫌がらせをする気がする。	−0.04	0.81
pr5 私は、他人が私のすることを見ている気がする。	0.01	0.76
pr6 私は、他人が私の状況に影響している気がする。	0.02	0.73
pr1 私は、私の行動が調べられている気がする。	−0.01	0.72
pr3 私は、人が私を嫌っている気がする。	0.18	0.67
α 係数	0.90	0.89

Table 1：パラノイア感尺度・抑うつ感尺度の因子分析の結果 (n=222)

	1. 抑うつ感	2. パラノイア感	3. 疲労感	4. 被受容感	5. 被拒絶感	6. SDS	7. ソーシャルスキル(の欠如)	8. 賞賛獲得欲求	M(男性)	SD(男性)
1	1.00	0.53***	0.54***	-0.45***	0.44***	0.69***	0.41***	0.04	26.74	8.69
2	0.55***	1.00	0.34***	-0.18+	0.41***	0.59***	0.22*	0.07	14.23	5.95
3	0.42***	0.28**	1.00	-0.16+	0.24*	0.50***	0.24*	0.10	6.41	2.54
4	-0.38***	-0.32**	-0.09	1.00	-0.31**	-0.47***	-0.55***	0.33***	7.12	1.59
5	0.47***	0.55***	0.26**	-0.30**	1.00	0.59***	0.40***	-0.23*	5.05	1.68
6	0.63***	0.54***	0.52***	-0.33***	0.44***	1.00	0.44***	-0.04	44.47	7.77
7	0.25**	0.19*	-0.01	-0.32**	0.25**	0.28	1.00	-0.50***	8.42	2.25
8	-0.15	0.07	0.03	0.18*	0.09	-0.08	-0.21*	1.00	8.99	2.88
M(女性)	28.49	13.48	6.98	7.10	4.27	45.75	8.19	8.87		
SD(女性)	8.24	5.98	2.77	1.42	1.45	6.93	2.03	2.76		

Table 2: 各尺度間の相関係数, 平均値, SD (右斜め上: 男性, n=93/左斜め下: 女性, n=117)

+ : $p < .10$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

人関係に関わる変数は男女差が示唆されることが多い。そこで、ここからは男女別に統計的な手続きを行った。

パラノイア感, 抑うつ感ともに被拒絶感と統計的に有意な正の相関がみられ, 被受容感とは有意傾向(女性に限れば有意)の負の相関, 抑うつ感と有意な負の相関が見られた。このことから, パラノイア感尺度, 抑うつ感尺度ともに被受容感尺度, 被拒絶感尺度とは定義から示唆される関係性が見られたと言えるだろう。また, 抑うつ感とは SDS で測定した抑うつ傾向と正の相関を示している。抑うつ感尺度の基準関連妥当性を示唆する結果と言えるだろう。

賞賛獲得欲求とパラノイア感: 構成概念から被受容感が低い場合に賞賛獲得欲求が高まるとパラノイア感が増すことが示唆されるので, 検討のために部分分散分析を用いて被受容感と賞賛獲得欲求の交互作用を検討した。従属変数はパラノイア感のほか, 比較のために抑うつ感も設定して行った。

その結果, パラノイア感については男性では被受容感の主効果のみが有意 ($p < .001$), 女性では被受容感の主効果 ($p < .001$) と交互作用 ($p < .01$) が有意, 賞賛獲得欲求の主効果 ($p < .10$) が有意傾向であった。また, 抑うつ感については男性では被受容感の主効果 ($p < .001$), 賞賛獲得欲求の主効果 ($p < .05$) が有意, 女性では被受容感の主効果 ($p < .001$), 交互作用 ($p < .05$) が有意であった。

女性で見出された交互作用の内容を検討したところ (Figure 1), パラノイア感を従属変数にした場合は被受容感が低い場合に賞賛獲得欲求が高いとパラノイア感が高まる傾向が見られたが, 被受容感が高い場合は全般的にパラノイア感が低い傾向が見られた。女性に限れば他者の視線を意識することでパラノイア感が増すという構成概念上の仮説は被受容感が低い場合に支持されたとと言えるだろう。

一方で抑うつ感を従属変数にした場合は被受容感が低いと全般的に抑うつ感が高く先行研究 (e.g., 杉山, 2005) と同じ傾向が見られた他, 被受容感が高い場合に賞賛獲得欲求が高いと抑うつ感が低くなる傾向が示唆された。つまり被受容感が低い場合には賞賛獲得欲求の抑うつへの影響は見られなかった (Figure 2)。

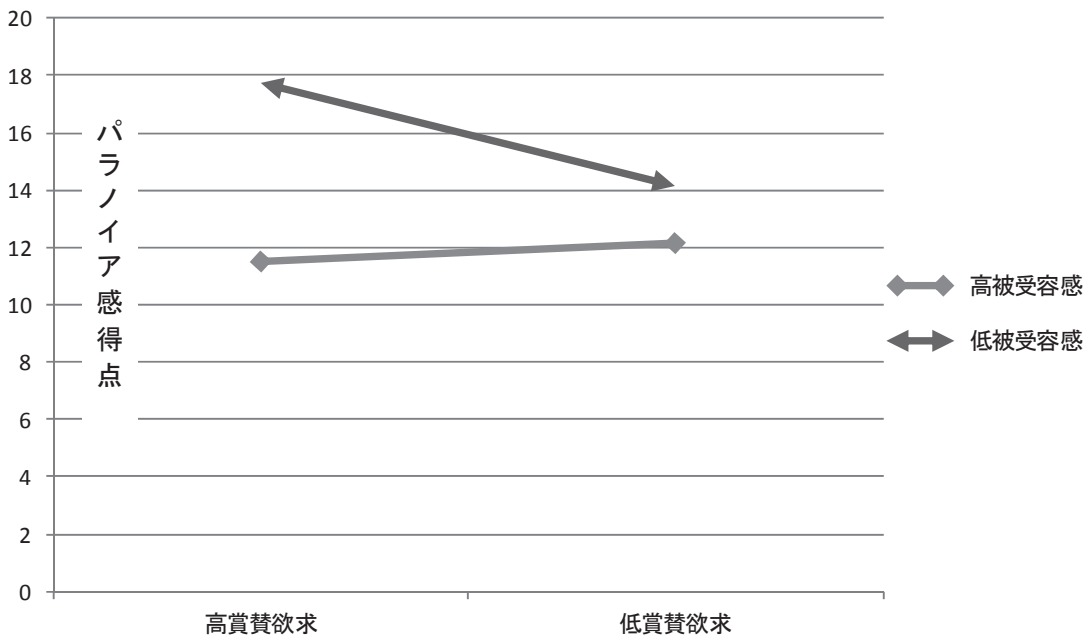


Figure 1：パラノイア感を従属変数にした場合の女性の交互作用の結果

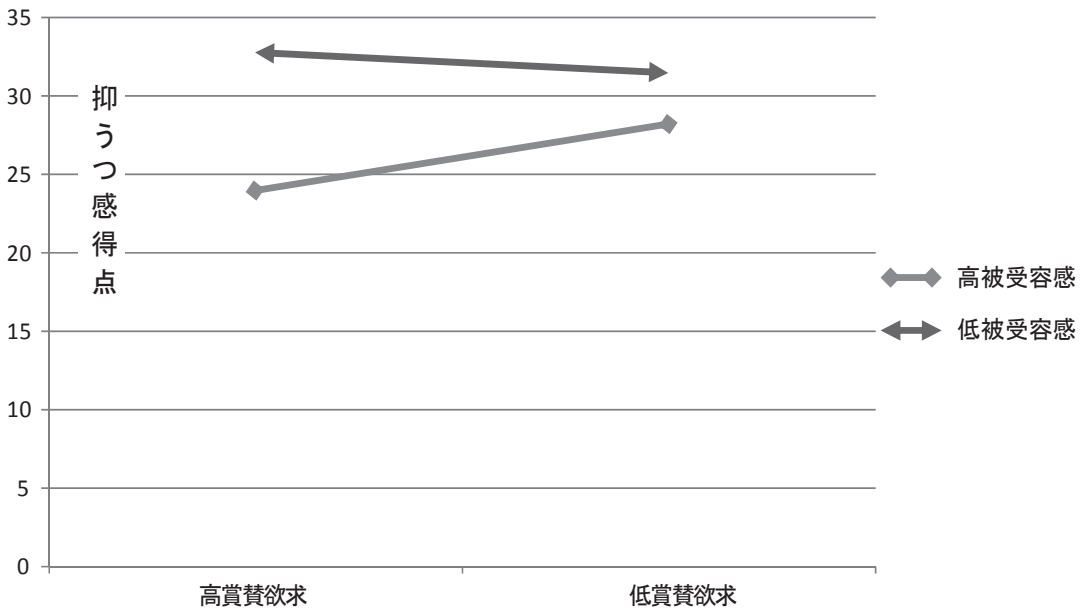


Figure 2：抑うつ感を従属変数にした場合の女性の交互作用の結果

社会的スキルの欠如（社会的退却）と疲労感との関連：抑うつ感の定義は疲労感および社会的スキルの欠如をもたらすことを示唆する一方で、パラノイア感にはそのような示唆はない。そこで、共分散構造分析によるパス解析で「抑うつ感→疲労感・社会的スキル（の欠如）」と「抑うつ感・パラノイア感→疲労感・社会的スキル（の欠如）」のどちらのモデルが支持されるか検討した。

Goodness of Fit Index (GFI)=0.99
 GFI Adjusted for Degrees of Freedom (AGFI)=0.98
 RMSEA=0.00

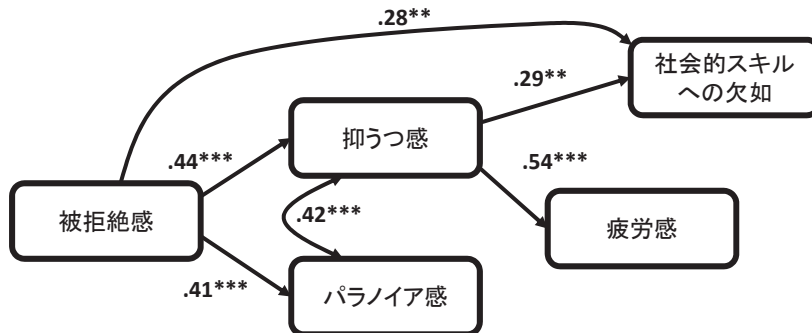


Figure 3：社会的スキル、疲労感への抑うつ感、パラノイア感の影響（男性）

* : $p < .001$, ** : $p < .01$, *** : $p < .05$

Goodness of Fit Index (GFI)=0.99
 GFI Adjusted for Degrees of Freedom (AGFI)=0.98
 RMSEA=0.00

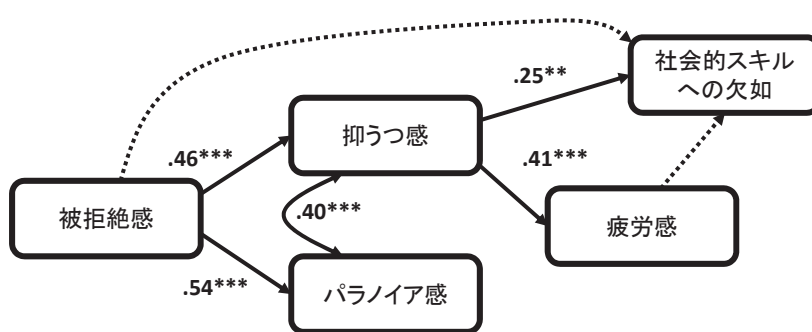


Figure 4：社会的スキル、疲労感への抑うつ感、パラノイア感の影響（女性）

* : $p < .001$, ** : $p < .01$, *** : $p < .05$

なお、社会的スキルはパラノイア感、抑うつ感の共通の要因と考えられる被拒絶感も影響するものと考えられるので、「被拒絶感→パラノイア感・抑うつ感」「被拒絶感→社会的スキル（の欠如）」のパスを仮定した。また疲労感が社会的退却を促す可能性も考えられるので「疲労感→社会的スキル（の欠如）」のパスも仮定した。さらに、被拒絶感は抑うつ感とパラノイア感の共通要因と考えられるが、それ以外の共通要因もあると考えられるのでパラノイア感と抑うつ感の間に相関関係（両変数を説明する誤差変数間の相関）を仮定した。

パラノイア感が抑うつ感と同じように疲労感、社会的スキルの欠如に関与すると仮定したモデルと関与しないと仮定したモデルを比較検討したところ、男女ともパラノイア感から疲労感、社会的スキルへの因果係数が.10未満でパスを想定する必然性が棄却された。そこでパラノイア感と抑うつ感の間に相関関係（両変数を説明する誤差変数間の相関）を仮定したモデルを採択した（Figure 3, 4）。

5. 考察

本研究で作成したパラノイア感尺度、抑うつ感尺度は α 係数で確認する限り一定の信頼性を備え、定義から導かれた被受容感・被拒絶感、賞賛獲得欲求、疲労感、社会的スキルとの関連も支持された。よって、一定の妥当性も備えた尺度であることが示唆されるので、今後の心理学研究で活用可能であると言える。

各変数との関係はほぼ仮説通りに見られたが、賞賛獲得欲求のパラノイア感への関与については女性のみに限られた。本研究では他者の視線から逃れにくい個人変数として賞賛獲得欲求を採用したが、相対的に対人関係に敏感とされる女性における賞賛獲得欲求と男性における賞賛獲得欲求はその意味が異なるのかもしれない。男性における他者の視線から逃れにくい個人変数をより緻密に検討して、より適切な仮説を立てて男性のパラノイア感増強について検討する必要がある。

Figure 2 について、被受容感が高い女性においては賞賛獲得欲求が低いと相対的に抑うつ感が高い傾向が見出された。この結果は今後の検討が必要だが、賞賛獲得欲求が高いことで他者から受容されていることをより実感するライフイベントが増える、などのプロセスがあるのかもしれない。男性ではこのような傾向が見られなかったことを考慮すると、賞賛獲得欲求の意味が男女で違っていることをさらに示唆する結果とも言えるだろう。

Figure 3, 4 について、被拒絶感をパラノイア感と抑うつ感の共通要因として投入したが、パラノイア感と抑うつ感には相関関係（偏相関）が見られた。この相関関係は両変数が別の共通要因を持つ可能性と、因果関係を持つ可能性が考えられる。本研究にはこの問題を検討できる資料はないが、今後の検討課題の一つと考えられる。

なお、本研究では再検査信頼性を検討していないが、本研究で定義したパラノイア感、抑うつ感は心理学のプロセスの結果としての心理学概念である。項目作成で参考にした Bodner & Mikulincer (1998) の尺度も注目操作による実験的介入で変化することが示唆されている。したがって心理学の介入や操作によって変化する可能性が高い可能性があると考えられる。よって、定義の上では再検査信頼性による信頼性の検討にはなじまないと言えるだろう。

最後に本研究で作成したパラノイア感尺度、抑うつ感尺度は症状の重篤度を測定する臨床的な尺度として活用できるかどうかは検討されていない。今後の検討課題の一つと言えるだろう。ただ、心理学のプロセスに関する調査研究だけでなく、心理学の介入実験の効果測定にも活用が可能だと考えられる。本尺度が微力でも今後の心理学研究の発展に資するものであれば幸いである。

【文 献】

- Bodner, E., & Mikulincer, M. (1998). Learned Helplessness and the Occurrence of Depressive-Like and Paranoid-Like Responses: The Role of Attentional Focus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1010-1023.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究, 精神神経学雑誌, 75, 673-679.

- 小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み，性格心理学研究，11，86-98.
- 岡本泰昌（2009）うつ病の病態に関わる脳内基盤，聖心神経学雑誌，111（11），1330-1344.
- 尾関友佳子（1993）大学生用ストレス自己評価尺度の改訂，久留米大学大学院比較文化研究科年報，1，95-114.
- 坂本真士・村中昌紀・山川樹（2014）臨床社会心理学における“自己”：「新型うつ」への考察を通して，心理学評論，57（3），405-429.
- 杉山崇（2002）臨床心理学研究における抑うつの定義と研究モデルについて，学習院大学人文科学論集，11，187-204.
- 杉山崇（2005）抑うつと対人関係，坂本真士・丹野義彦・大野裕（編）抑うつの臨床心理学，東京大学出版会.
- 杉山崇・坂本真士（2006）抑うつの対人関係要因の研究，健康心理学研究，19（2），1-10.
- 杉山崇・前田泰宏・坂本真士（編）（2007）これからの心理臨床，ナカニシヤ出版.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S.,（2004）自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版の標準化：高機能臨床群と健常成人による検討，心理学研究，75（1），78-84.
- Zung, W. W. K.（1965）A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.

注）この研究の一部は科学研究費助成金（15K13148）の補助を受けた。

